

# Views from Orienteering

村越 真

## View69: 聖地巡礼

登山に地形図は付きものだが、その提供形態は国によって違う。かつては、登山地図といえば地形図だったが、最近の日本ではむしろ昭文社の登山地図を利用している人が多数派だ。しかし、ヨーロッパではこれは例外的な提供形態である。ほとんどの国で政府機関の出す地図をベースにして、登山道が上書きされる形で登山地図が提供されている。

唯一の例外がイギリスである。イギリスの地図と言えば OS(オーディナンス・サーベイ)が有名で、登山やトレッキングに特化したアウトドア地図を発行している。それと並んでハーベイ社が独立して登山地図を提供している。この特異な提供形態にはオリエンテeringが絡んでいる。話しは1970年代に遡る。

1976年、スコットランドで世界オリエンテering選手権が開催された。世界選手権がスタートしたのは1966年だから、第6回目の世界選手権だ。それ以前の開催国はフィンランド、スウェーデン、東ドイツ、チェコ、デンマーク。当時チェコスロバキアを中心とする東欧は北欧に次ぐオリエンテering先進国であった。それらに引き続いてのスコットランドでの開催は、発祥地ノルウェーよりも早いのだ。そこで中心的な役割を果たしたのがロビン・ハーベイ、ハーベイ社の創始者である。

国際事情に詳しい人なら、数年前まで IOF の会長はスー・ハーベイだったことを憶えているだろう。スーはロビンとともに、このハーベイ社を立ち上げている。

ロビンは元々建築の仕事をしていた。1965年に初めてオーリングンに行った時、スウェーデンでも 0-map への移行が試行的に行われていた。オーリングンでも5日のうち3日で 0-map が使われていた。それを見たロビンとジェフ・ペック(1970年代のイギリスを代表するエリート選手)は、「スウェーデンでも作れるなら自分たちでも作れるんじゃないか」と思って地図を作った。それがイギリス初の 0-map となった。そして10年後、ロビンはグラスゴー大学の地理学科で空中写真から地図を作る図化の方法を学び、また地理学科の

教授の協力を得て、それまでのどの世界選手権にも引けを取らないどころか、最も美しいとも言える出来映えの地図を提供した。

その後ロビンが選んだのが地図をイベントや登山に提供するという仕事だった。当時イギリスではキャリマーという登山用具の会社がマウンテンマラソンという約40kmのコースを二日間毎日走り、しかも、夜は自分たちで運んだ用具だけでキャンプするという耐久競技をしていた(詳しくはview71参照)。その競技にも地図を提供した。イギリスは登山と同時に長距離遊歩道とウォーキングの発達している。それらに対する地図の提供も始めた。今でも、大きなアウトドアショップや書店にいくと、イギリスの代表的地形図であるオーディナンス・サーベイ(通称 OS)の隣でハーベイ社の地図が販売されている。

山岳遭難対策の研究の一環で、彼らのオフィス兼作業場を9月に訪問した。日本の昭文社の社屋を訪問したところのある私は立派な社屋を想像していたが、ローマ時代からの歴史を持つ Daune という街の中心街に面する彼らのオフィスは、会社というよりも古い工房のようだった。ショーウィンドウには、洋品やお土産の代わりに地図が並んでいた。作業場では、図化や編集の作業が行われていた。かつての地形図は空中写真を立体視しながら曲芸のように手足でカーソルを動かして描画していたが、現在ではコンピュータ化されている。ほとんどがオープンな荒野や牧場のイギリスでは、地上の特徴の多くは空中写真から読み取ることができる。しかも最近ではレーザー測定のデータで、等高線の図化も不要になった。それでも、地図作成の過程では、地図調査者が現地を訪れ、確認をし、編集を経て地図が完成する。

いつか、地図作成で生計を立てようと考えたこともある私にとって、そこは聖地とも言える場所だった。古びた町屋のようなオフィスの作りが、聖地にふさわしい雰囲気醸し出していた。



ハーベイ社が作成する様々な地図や地図教育の教材



ロビンがコンピュータ式の図化機を操作して見せてくれた



Doune の中心街にある古い町屋がハーベイ社の本社兼作業場だ

## View70: 失格宣告

スポーツ競技にルールは不可欠だ。ルールが決められているからこそ、その中で最大のパフォーマンスを発揮しようと選手は努力する。手を使うことをルールで禁止するから、サッカーには目を見張るような足技が生まれる。あるいは、オフサイドというルールがあるからこそ、駆け引きの妙味も生まれる。また、ルールは公平な競技を世界のどこでも成り立たせる役目がある。私達が国際大会に安心して参加できるのもルールがあり、それが国際的に統一されているからである。ルールがあるから、M20に出場した時に、20kmも走らされるということはない。

ここ10年ほどの間興隆したトレランには、統一組織がない。従って共通のルールもない。しかし、安全や環境・他の活動者への配慮から、大会それぞれで参加者が守るべき事項が示されている。私に関わっている富士山一周100マイルのトレイルランニングレースも、丸二日間にわたって自然の中で移動する過酷なレースである。従って、トレランの中でもっとも厳しく詳細なルールが課されている。特に重要なのは必須装備である。テープによって誘導されているトレランだが、時には道迷いもある。悪天候でも実施される。標高2000m近い場所も通る。こうしたレース環境でトラブルを防ぎ、万が一トラブルがあってもそのダメージを拡大させないためには、参加者が十分な装備を持っている必要がある。

必携装備の内容は、食料や水、雨具やヘッドライトはもちろん、緊急時に本部に連絡を取るための携帯電話と場所を確認するための地図、もし動けなくなった時、救助を受けるまでの間暖を取るためのサバイバルシートなどである。これらがあってもトラブルに遭遇する確率は減らない。だが、装備によって不測の事態をコントロール下におき、ダメージを最小限に減らすことができる。そうでなければ、選手の安全は非常に危ういものになってしまうだろう。

一方で、トレランは順位やタイムを競う競技でもある。装備は少なく、軽いに越したことはない。その時の天候や環境条件によっては、十中八九使うあてのない装備もある。使わないなら携帯したくないと思うのが人情だ。それを個人個人に委ねていれば、参加者の多くはリスクを取る。そこに必携装備の意義がある。そして、その趣旨を徹底させるために、レース前とレース中に装備チェックを行っている。

今回、レース中の装備チェックに立ち会った。想定内ではあったが、20人を越える失格を宣告することになった。その多くは天候が回復し、もう雨の見込みがないと分かって途中のデポジット地点で雨具を置いてきた人たちだった。中にはコース地図を所持していない人もいた。携帯の電源が切れていて、失格になった人もいる。彼らは160kmを走破するために時間をかけて準備し、36000円の参加費を払い、しかも約130kmを走破してきた。フィニッシュまではあとたったの30kmだ。その彼らに失格を告げるのは心苦しい。失格者からも「夜のトレイルで滑落し、その時に落とした」「\*\*（海外の地名）から

来た」と、訴えられた。「ここまでは、無事に来たではないか」と言う参加者もいる。彼らも辛いだろうが、失格を宣告する方も辛い。

一方でこうも思った。必須装備は自然の中で安全に他者とともに活動する上で不可欠なルールだ。それがなければ、不測の事態で命を危険に晒しかねない。それをコントロールするための装備を持つことは、登山や自然の中で遊ぶ時には常識とも言える。今回、あるいはここまではたまたま運がよかっただけかもしれない。あるいはここで「痛い目」に合わなければ、いつまでも自然環境を甘く見、いつかどこかで取り返しのつかない事態に遭遇するかもしれない。レースでは最終的には主催者の救助隊が出動するが、まずは自分自身で自分の身を守ることが強調されている。そのために自分の責任で装備を持つ必要性について考えなかったのだろうか。あるいは、レースや完走が大事と言うなら、最後まで走りきる権利を自分で勝ち取るために、なぜルールを遵守しないのだろうか。

チェックした装備は必携装備の一部の5点なので、20人という失格者数は氷山の一部なのかもしれない。それでも通過者の約3%の失格者が出たことは、図らずも、参加者と主催者側のスポーツルールに関する意識の違いを浮き彫りにすることとなった。

翻って、ルールに対するオリエンテリング競技者の意識はどうだろう。オリエンテリング大会は競技規則、地図の規程、そして各大会の実施上のプログラムの3つの主要な約束毎によって成り立っている。大会プログラムを読まない人はいないだろうが、競技規則、地図の規程をきちんと読み、理解している人は、コントローラや競技運営の経験者でない限り少数派に感じられる。これらを読み、それを遵守することによって初めて競技は公正なものとなり、気持ちよくレースを終えることができる。それだけでなく、たとえば地図規程に精通すれば目も醒めるような精緻なナビゲーションの手がかりとなるかもしれない。

そして、それ以上にフィールドを舞台とするスポーツにおいては、ルールを守ることで始めて、フィールドを共有する他者や自然環境上の問題を発生させることなくスポーツを実施することができる。これらが機能しているからこそ、私たちは安心して大会を主催し、また参加することができる。そして、それによって社会からの信頼を得、自

然の中で遊ぶ権利を得ることができる。

トレランで時々起こるのだが、出走者の全員帰還を確認せずに大会を終える主催者がいる。もしそれが実際に山の中の遭難で、のちに警察が独自に出動してその未帰還者を発見することになったとしたら、その後大会開催は危うくなるだろう。同じことがオリエンテリングで発生することを想像してみたい。

「規則は何のため？」を改めて考えてみたい。



二日目の夜、選手たちは絶え間なく山中湖のエイドを通過する。この日は未明から山中湖のエイドで装備チェックに当たっていた



装備チェックの様子。「本当に必須装備は入っているの？」そんなふうに思えるトップ選手のザックも、規定ぎりぎりであるがちゃんと装備は揃っている。ルールに対するシビアな姿勢が垣間見える



おまけ画像。トレーナーの施術を受けて闘絶する鹿島田選手









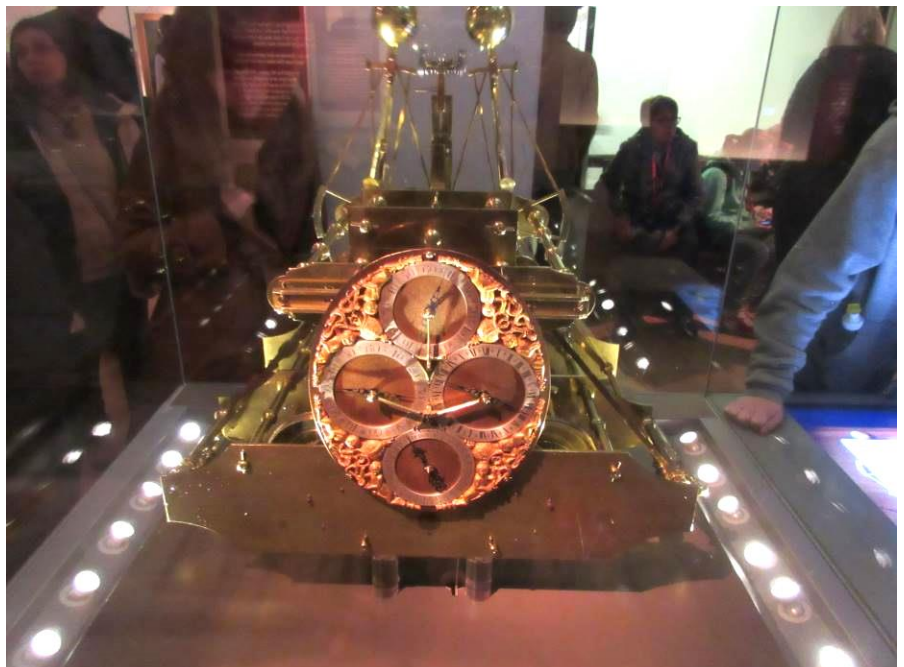
今年も雨の中スタートとなった OMM。僕らも過酷だが、オフィシャルも過酷だ。高齢ともいえるおばさんが、一人で雨の中座って通過者チェックをしていた

性だった。気がつく、女性の方が二人分の荷物を担ぎ、喘ぎながら登っている父親を尻目にガシガシと急斜面を登っていく。「俺は歳をとりすぎたよ。あいつは心肺機能が強くてなあ・・・」と嘆いているが、このお父さんも意外に下りは早くナビゲーションでもイニシアティブを取っていた。こうして冒険の文化は次の世代に inspire されていくのだろう。

OMMレース参加の帰りに、ロンドンのグリニッジ天文台に寄った。今では世界遺産として充実した展示が見られる。その中に Time and Longitude というコーナーがあった。地図だけで航海はできない。海では地図と対応させるための現在地情報が得られないからだ。緯度と経度がわかれば、現在地がわかる。緯度は簡単だ。北極星の高度によってわかる。問題は経度だった。原理的には時間を正確に測るか、天体観測によって経度を知ることができるはずだった。たとえばロンドンの時刻がわかれば、その場所の太陽の南中時刻（それがその場所の 12 時である）がわかれば時差によって緯度がわかる。しかし、すでに振り子時計はあったものの、揺れる船の上で正確に時を刻み続けることはできなかった。天体観測には膨大なデータが必要だった。現在地がわからないばかりにイギリスは多くの商船や海軍船を失った。経度を知る方法は、イギリスが海洋国として生き延びるために必須であった。議会はこの方法の発明に 20000 ポンドの賞金を賭けた。

その賞金を受けたのは、海でも正確に

時を刻み続ける時計クロノメーターを発明したジョン・ハリソンだった。学者でも企業家でもない一介の職人ジョン・ハリソンは、自力でこの問題に立ち向かい解決する。クロノメーターはイギリスの冒険精神の帰結であると同時に、イギリスの海洋での覇権を確立する大きな要因となった。同時期、グリニッジ天文台で行われた天体観測も経度の実用的な測定を可能にするだけのデータを提供していた。クロノメーターの開発と天体観測による経度の測定、そして両者の葛藤にはここでは紹介しきれないほどの物語がある。特に



ハリソンのクロノメーター1号。ハリソンの発明が、船舶が経度を正確に知ることを可能にし、近代的な航海術が完成する

ハリソンがクロノメーターを完成させ、その成果が認められるまでの経緯はサクセス・ストーリーというよりは苦難に満ちた過酷な物語だ。ナビゲーションを支えたクラフトマンシップとサイエンスにもまた、冒険物語があったのだ。

注1：過酷なことを平然と、しかも嬉々としてやってのけることでは、ノルウェー人の右に出るものはない、と杉山隆司氏からコメントがあった。そのとおり。極点一番乗りのアムンゼンはノルウェー人だった。初期の OMM (当時は KMM) では、ノルウェー人のオリエンティア組が毎年優勝していたそうだ。(村越 真)